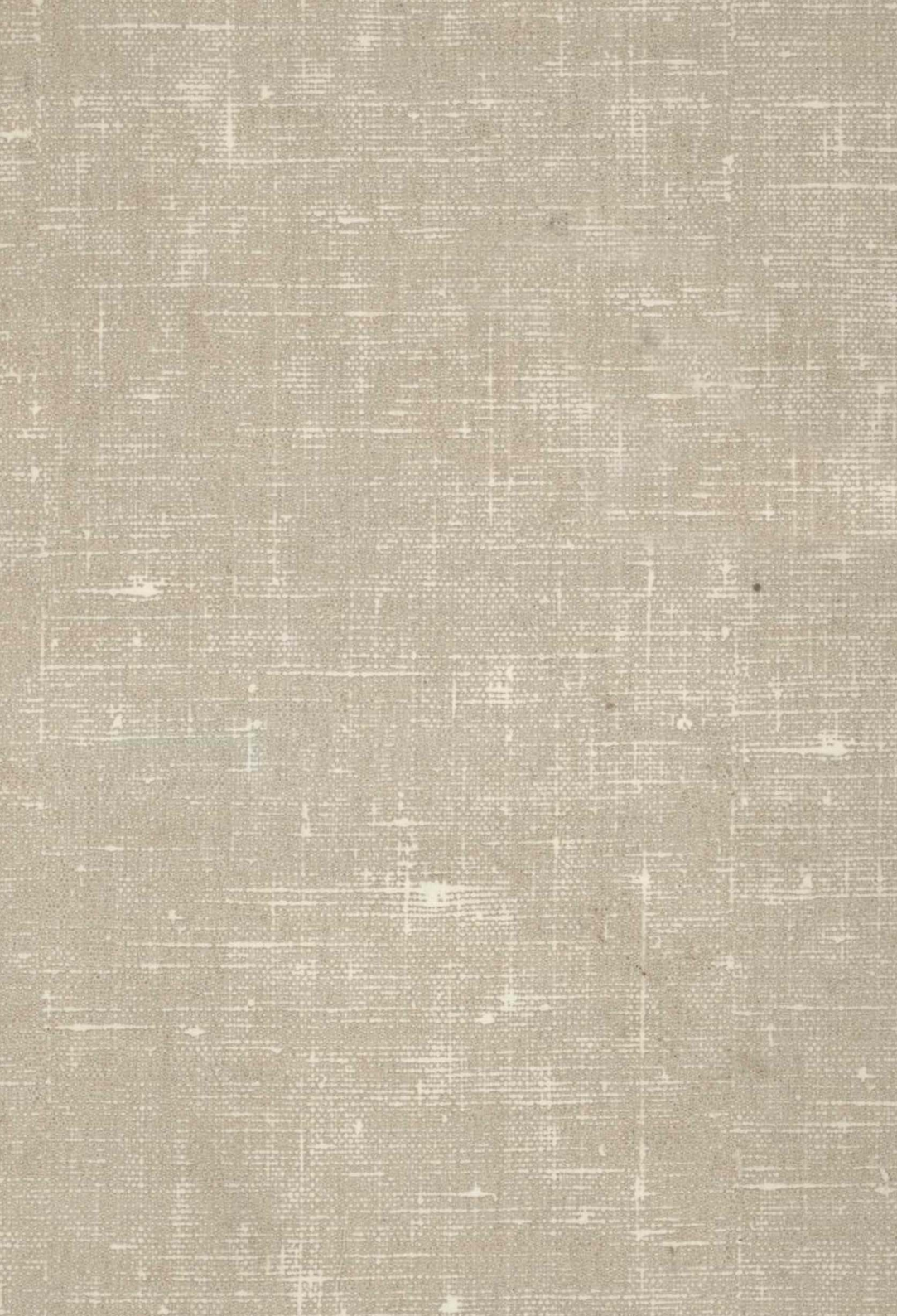




貨幣論概要

原 遠 著
藤 茂 薰雄

法政大学出版社

原 薫（はら かおる）
1928年生，法政大学経済学部教授
主著『日本の戦後インフレーション』
遠藤茂雄（えんどう しげお）
1929年生，法政大学第二教養部教授

貨 幣 論 概 要

1978年12月20日 初版第1刷発行
1983年8月30日 第3刷発行

著 者 原 薫
遠 藤 茂 雄

発行所 財団 法人 法政大学出版局
〒106 東京都港区南麻布2-8-4
振替／東京 6-95814番
電話／03(453)0717
三和印刷／鈴木製本所

3033-40092-7710

*定価は箱に表示してあります

まえがき

本書は「貨幣論」の講義テキストとして作成されたものである。本書の主旨や貨幣論の講義の意図については序章に記したが、それは、資本主義経済の分析の一環として、そのなかで不可欠な存在となっている貨幣の性質や諸機能とそれを巡る現実的な諸問題について考察するものである。そしてここでは、今日の不換通貨制度下の諸問題や最近の国際通貨問題など、現代の資本主義体制における貨幣の諸問題を、基礎理論と資本主義の歴史的推移との関連の下で統一的に把握することに重点をおいている。

本書は、このような貨幣論の授業内容の大筋を記述したものであって、本書で取上げたそれぞれの項目についてのより詳しい説明、とくに個々の具体例や数値的な説明、および論争点の紹介などは、講義に譲ることになっている。

また本書のなかで、各項目についての参考文献を掲げたが、これはもとより網羅的ではなく、まず問題の所在を理解し、また考察を進めるさいの拠り所として参考になるであろうとみられる文献を摘記したものである。ここに引用させていただいたこれらの先学の方々の御研究に謝意を表するとともに、本書にたいする批判と御教示を切望する次第である。

本書の内容はまだきわめて不十分であって、今後ともその充実に努めて行かねばならないが、本書

が、今日の貨幣問題を統一的に把握するための基礎として読まれるならば誠に幸いである。終りに、本書の刊行について御配慮下された法政大学出版局と稲義人、松永辰郎の両氏に厚く御礼を申し上げます。

一九七八年 夏

著 者

目次

まえがき

序章 貨幣論の課題と本書の構成	1
-----------------	---

一 貨幣問題の変遷	2
-----------	---

二 貨幣論の課題	4
----------	---

三 本書の構成	7
---------	---

第一章 貨幣	13
--------	----

一 貨幣の本質	13
---------	----

(一) 商品生産の特徴	13
-------------	----

(二) 価値形態	17
----------	----

(三) 交換過程	25
----------	----

二 貨幣の諸機能	30
----------	----

(一) 価値尺度	31
----------	----

《付》 価値尺度機能の展開	41
---------------	----

(一)	流通手段	48
(二)	貨幣	56
	《付》 古典派経済学における貨幣	66
三	資本制生産における貨幣	73
(一)	資本制生産と貨幣の運動	74
(二)	資本の運動と貨幣流通の法則	81
(三)	資本の運動と貨幣諸準備金	84
(四)	貨幣材料の生産	90
第二章	紙幣	93
一	紙幣の性質	93
二	政府紙幣	94
三	紙幣の流通法則	97
四	インフレーションと物価変動	100
	《付》 貨幣数量説	106
第三章	信用貨幣	113
一	信用貨幣の一般的性質	114

二	商業手形	116
三	銀行券	121
四	預金通貨	127
第四章	貨幣制度	133
一	貨幣制度の確立	133
二	金本位制度の成立	135
三	金本位制度の構造	142
(一)	貨幣制度	143
(二)	發券制度	151
	《付》 金本位制度と「自動調節作用」	156
(三)	わが国の貨幣制度と發券制度	163
第五章	不換通貨制度	171
一	金本位制度の崩壊	171
二	通貨制度の現状	186
(一)	現在の通貨形態	186
(二)	發券制度の変化	190

(三)	「管理通貨制度」	202
第六章	国際通貨	213
一	国際通貨の特徴	213
二	外国為替相場の変動	217
三	不換通貨制度下の国際通貨問題	219
(一)	不換通貨制度下の為替相場	219
(二)	I M F体制	225
(三)	国際通貨体制の現状	236

序章 貨幣論の課題と本書の構成

今日、貨幣の問題に関心をもち、それを学ぶ必要を感じるさいに、その契機となるのは、当然、われわれをとりまく現実の諸問題への対応であろう。そしてそれには、今日における物価の上昇やインフレーションの進行、あるいはスタグフレーション状態の発生などの問題が、他方ではまた、繰り返される国際通貨不安や変動相場制下の国際通貨問題が、大きく影響していることであろう。

しかし今日、「貨幣」とはいつでも、われわれの目の前にあって日常使っているものは、専ら日本銀行券という紙製の通貨であり、また企業間の取引の決済には小切手（それによって移転される預金通貨）が主に用いられていて、さきにあげた問題もこうした通貨の流通の環境で生じているものである。「貨幣論」もこのような現実の諸問題の解明を離れては決してあり得ないが、ではこれらの解明に「貨幣」を取上げる必要がなぜあるのだろうか。

例えば、以前の金本位制度下といわれた時代には、貨幣が実際に流通し、貨幣制度が制度として機能していた。もちろん、当時においても、銀行券などの信用貨幣が広く用いられていたが、その信用貨幣の流通には、本来の貨幣への転換の確実さが基本的な条件となっていた。貨幣論も、貨幣の実在という条件を背景にもっていたのである。

ところが今日では、貨幣の流通が姿を消して久しく、貨幣とは一見無関係な紙幣や預金通貨が一般に流通し、同時にまた、貨幣をただ、交換手段などというその働きそのものとしてとらえる考え方も広まっている。それにもかかわらず、現在の諸問題を考察するのになぜ貨幣をもちだす必要があるのか。貨幣論の現代的な意義はどこにあるのだろうか。

一 貨幣問題の変遷

貨幣の歴史は古いが、それが重要な経済問題として理論的考察の対象とされるようになるのは、一七世紀以降における資本主義の発展とそれにもとづく商品生産・流通の発展のもとにおいてであった。例えば、金・銀をもって富の唯一の形態であるとした重金主義的政策の展開、これを批判して金・銀はたんなる商品であり流通用具であるとする古典派経済学の貨幣説とそれにもとづく政策的主張、また金・銀の流出入と物価変動との関係、金・銀複本位制状態のもとの貨幣制度の混乱とその対策の必要、さらにアメリカの独立戦争やフランス革命の時期における政府紙幣の増発と減価、インフレーション銀行券の兌換停止（一八世紀末―一九世紀初め）とその影響、等々――貨幣の考察はまずこうした現実の諸問題や政策問題に触発され、それに応えるべきものとして進められ、貨幣の性質と機能、貨幣の価値、貨幣の流通量と物価との関係などについて論議が展開された。そしてそこでは、今日なお様々な形で影響を及ぼしている貨幣数量説の浸透がみられた。

同時にまた、それらの貨幣問題は、信用制度の発展とそれにもとづく銀行券など信用貨幣の流通の

拡大のもとでの問題であることから、貨幣の考察は信用制度の考察と深く結びつき、むしろ銀行券の発行・流通や銀行信用のあり方などの考察を直接の契機として取り上げられることになった。このことは、イングランド銀行券の兌換停止期の諸問題についての論議や、ピール条令の制定（イギリス、一八四四年）を巡る論争によく示されている。

その後、一九世紀を通じて金本位制度が世界的に普及し、金が貨幣の地位を独占するようになるが、その時期にはまず、金・銀生産の増大とそれらの価値変動（および金・銀比価の変動）、貨幣制度や物価へのその影響などが、大きな問題となった。しかし、同時に他方では、金本位制度への世界的な移行のなかで、金準備の維持・確保が、中央銀行を頂点とする信用制度の運営にとっての基本的条件となることによって、貨幣の問題は金準備の問題として、中央銀行の発券や利子率操作など信用制度の問題の基礎として扱われる傾向が強まった。そしてこれに関連して、金本位制度の自動調節作用についての議論が盛行した。

金本位制度は第一次大戦の勃発によって世界的に停止されるが、このことは、貨幣の考察にも大きな影響をあたえた。すなわち、不換銀行券や政府紙幣の流通の一般化、そのもとでのインフレーションの発生、さらに戦後復興の一環としての貨幣制度の再建、等々の動きを背景として、貨幣の本質を国家の役割に即して規定し、紙幣をもってその典型的な形態であると説く「ミニナリズム」が、わが国をもふくめて国際的に普及した。そしてまた、こうした貨幣説に立脚して、戦争によって生じた不換通貨制度を資本主義体制の維持のための政策的手段として利用すべきだとする「管理通貨」の構想が現

われた。

その後、一九二〇年代後半期に、金本位制度は国際的に一応の再建をみるが、世界恐慌の発生によって程なく崩壊した。そして一九三〇年代以降、不換通貨制度が定着して今日に至っており、また「管理通貨制度」としてそれが「制度化」されている。そして、貨幣の考察においても、そこでは貨幣は一般に「管理」の手段の問題として扱われ、通貨供給の操作が経済変動にどう作用するかといった技術的な分析に重点がおかれるようになっていく。他方、国際通貨体制の問題についても、「IMF体制」の崩壊により動揺が続けている現状にあって、世界貨幣・金を除いた安定化の構想が打ち出され、また「金廃貨」の進展が強調されているのは、周知のところである。今日の貨幣論も、このような歴史的推移をふまえるとともに、現在の諸問題の解明の要請に応え得るものでなければならぬであろう。

二 貨幣論の課題

まず、貨幣論としてこれを総合的に説いた従来の書物をみると、それらは一般に、理論、制度、政策の三つの柱から構成されており、およそ次のような問題が取り上げられている——(1) 理論(貨幣の本質・諸機能、紙幣や信用貨幣などの派生的な貨幣形態、貨幣の価値または購買力、外国為替相場、など)、(2) 制度(本位貨幣・本位制度、貨幣制度の歴史的推移、金本位制度の成立および崩壊、その後の通貨制度、など)、(3) 政策(貨幣政策の目標、通貨の管理、景気変動との関係、など)。ただし

これらの内容は、基礎理論の違い、書かれた時代的背景や問題意識の違いなどによって、それぞれかなりの差異が生じている。貨幣論も生きた現実の課題にたいするものであり、固定化された教義や体系ではあり得ない以上、それは当然のことであるが、こうした状況はまた、貨幣論というものの内容の多様性を示すものともいえるのである。こうしたなかで、それでは現代における貨幣論は、どのような内容のものとしたらよいであろうか。

貨幣論も経済学の一分野である以上、今日における資本主義体制の経済的諸問題の考察に役立つものでなければならぬ。すなわち、貨幣論の意図は、貨幣問題を通じて現代資本主義の解明にあり、今日の貨幣問題を、貨幣の基礎理論と制度の歴史の変遷との関連のもとで統一的に把握することにある、ということができる。そして、そのさいにまず、貨幣の経済的意義を考察するのは、現代の資本主義が発達した商品生産をその一般的な基礎としているところから、そこでは貨幣の発生と存在が必然的であるという基本的な認識にもとづくものであり、さらに、今日みられる紙幣の一般的な流通の状況やそのもとの諸問題についても、この貨幣との関連性をまずおさえることが不可欠であり、そうでないかぎり十分な説明は不可能であるという認識によるものである。

このような理解は、いうまでもなくK・マルクスが『資本論』や『経済学批判』で展開した貨幣理論にもとづいている。マルクスは、周知のように、資本の分析に先立って商品と貨幣をまず考察し、商品および商品交換の必然的な産物としての貨幣の本質と、その諸機能について分析している。このような貨幣の考察は、資本の本性やその運動を明確に把握するための理論的な前提として行われている。

るのであるが、その貨幣理論は同時に、さきにふれたような一九世紀半ばに至る様々な貨幣説の批判と当時の現実的な諸問題の考察とを通じて展開された「最初の十全な貨幣理論」(『資本論』第二部のエンゲルスの序文)であった。なおマルクスの貨幣理論は、この段階(具体的には『資本論』第一部第三章)で終るものではなく、資本制生産の分析および信用制度の分析のなかでさらに具体化され、内容豊富なものとなる。貨幣論の展開にさいしても、その基礎として、こうしたマルクス貨幣理論の全体的な把握が不可欠となるのである。

ところで、『経済学批判』や『資本論』が書かれたのは、イギリスによる金本位制度の採用(一八一六年)をはじめとして同制度が世界的に普及して行く時代であったが、今日ではその金本位制度は崩壊し、不換紙幣の一般的な流通という新たな状況が生まれている。但し、このばあいにおいても、崩壊したのは国家的制度としての金本位制度であって、金が貨幣であるという経済的な事実(金本位制)であることには変わりはないが、しかしこの段階では、さらに、不換通貨制度の定着、それに依拠した通貨の政策的な「管理」、インフレーションの進行、等々の問題が加わっており、国際通貨体制の面でも新たな状況が生じている。貨幣論も、当然これらの問題の解明という現代的な要請に応えるものでなければならぬが、そのためには、マルクスの貨幣理論がやはり指針となるのであり、またその発展的な適用が必要になるといえるのである。

三 本書の構成

本書の構成は、大別して次のようになっている——(1) 貨幣の基礎理論、(2) 貨幣制度、(3) 不換通貨制度、(4) 国際通貨問題。

貨幣の基礎理論 貨幣を生みだすとともにそれを不可欠なものとするのは商品生産である。ここではまず、商品生産の特徴と関連させて貨幣の必然性の問題を考察し、貨幣の本質を、商品世界において一般的な等価物としての社会的機能をはたす特殊な商品として把握する。次いで、この貨幣の諸機能(価値尺度、流通手段、貨幣——蓄蔵貨幣、支払手段、世界貨幣)について述べ、これらの理解をもとに、貨幣機能の資本制生産における展開を、資本の運動との関係で考察する。

このなかではまた、貨幣の流通手段機能にもとづく価値章標の性質、その完成形態である政府紙幣、紙幣に特有な流通法則、などについて詳しく考察する。このことは、今日の日銀券の性質や流通法則をみるさいの不可欠な基礎であり、さらに、紙幣流通の法則、およびその法則貫徹の一つの現われである紙幣の「減価」についての理解は、インフレーションやそれにもとづく物価騰貴の特徴を考察するさいの基本的な前提となるのである。

次に、貨幣の支払手段機能に基礎をおく信用貨幣(商業手形、銀行券、預金通貨)を取り上げる。ここでは、信用貨幣とは貨幣支払約束自体が一定の貨幣機能を果すものであるという見地から、信用

貨幣の発行や流通、資本制生産におけるその役割などについて、これをとくに貨幣との結びつきや貨幣流通との関係の面から考察する。なお、ここでの信用貨幣は本来の貨幣への転換を約束し、それが確保されているものであり、銀行券のばあいには兌換銀行券であるが、こうした信用貨幣の性質、その発行や流通の特徴を把握することは、後に発生する兌換停止のもつ意味、今日の不換化した銀行券の性質、そしてその発行や流通などの問題を理解するための前提としてきわめて大切なことである。

貨幣制度

貨幣制度は貨幣がもつ諸機能に基礎をおりており、その諸機能の展開に適應した内容と構造をもつことになるが、まず、そうした貨幣制度の確立が近代資本主義国家によって達成されることの意義についてみる。また歴史的には、それが一九世紀における金本位制度の世界的な成立によって実現されたということから、金本位制度の成立にいたる貨幣制度の変遷、同制度の世界的な普及の過程について概観し、金本位制度を例として貨幣制度の仕組みをみる（本位貨幣および補助貨幣の性質、発行制度、また金の自由鑄造や自由な輸出入のもつ意義、など）。

さらに、この金本位制度が發展した信用制度を背景として成立したものである点に注目し、兌換制度の維持（中央銀行券の兌換性の確保）が、金本位制度にとっての必須条件となることを指摘する。次いで、これに関連して、金本位制度下の銀行券発行制度を考察し、金本位制度下での発券のあり方、貨幣・金準備の役割、および当時その存在が強調された「自動調節作用」の問題、などについてみて行く。このことは、今日の不換通貨制度下における発券方法、それに依拠した中央銀行のいわゆる通